

# 自分たちの表現をつくり出す力を育てる音楽学習の開発 (2)

— 音楽科で考える「協同的創造力」の育成を目指して —

黒瀬 基郎 濱本 恵康 桑田 一也 青原 栄子  
上野 陽美

## 1. はじめに

～21世紀に生きる人間に求められる力～

21世紀初頭の社会情勢は、地球規模でパートナーシップを結び、経済、社会、科学文化、環境問題など、よりグローバルな視点に立って解決すべき問題が山積する。グローバル社会、高度情報化・デジタル化を中心とするマルチメディア時代、そして人口減に伴う超少子化時代が到来している今現在、世界がグローバルな視点に立って建設的に物事を進めていかなければならない危機的状況にある。さらに、子どもたちは「生きる力」をベースに、たくましく健やかに、豊かな感性を持ち合わせながら、より人間らしく生活していくための力も培っていかなければならない。本研究は、「21世紀を生きる子どもたちが社会に出た際に、より人間らしく生きていくためには、音楽科の中でどのような力をつけておくべきなのか。」、また「21世紀の社会情勢を背景に学校教育の中における音楽科はどのような役割を担っているのか。」を探るために、21世紀型教科学力としてとらえている「協同的創造力」に着目して、その方策と実践を探るものである。

## 2. 本学園でとらえる21世紀に求められる音楽的な力

—音楽科で考える「協同的創造力」—

私たちは、21世紀を生きていく子どもたちに培われていかなければならない主な資質として次の5点を挙げた。これらは、21世紀の社会情勢と音楽科の中で育成したい力をタイアップして導き出したものである。

- 五感を通して多様な価値観や違いを感じ取る力  
→ 音・音楽に耳を傾け、五感を通して感じ取るうとする姿  
→ **①感じる力**
- 多様な価値観や違いについて自分なりにイメージすることができる想像力

→ 音・音楽から、自分なりの思いをふくらませようとする姿

→ **②イメージする力**

- 多様な価値観や違いをすり合わせていくことができるコミュニケーション能力

→ 自分たちの音楽を豊かな表現とするために、活発にコミュニケーションをとりながら協同作業を進めていく姿

→ **③コミュニケーション力**

- 新しいアイデアを生み出そうとする創造力

→ 音楽的感性を豊かにするために、自分たちの感じる音楽をつくり出し広げようとする姿

→ **④創造力**

- 自分の考えていることや思っていることを表情豊かに伝えることができる表現力

→ 子どもたち自身が感じた音楽を「これが自分たちの音楽だ」という思いを持って積極的に表情豊かに表現している姿

→ **⑤表現力**

この視点をもとにして、21世紀を生きる子どもたちに音楽科で育成すべき力は、「自分たちの感じる音楽をイメージ豊かにふくらませながら、協同作業を通して、積極的につくり出したり表現したりする力」ではないかと考えた。

私たちは、この「自分たちの表現をつくり出そうとする力」を音楽科における「協同的創造力」と位置づけ、この力を子どもたちに身につけさせるための方策を探るための実践を行うこととする。まずは、「協同的創造力」を支える5つの力をどのようにとらえるのかについて、次の項で説明する。

## 3. 「協同的創造力」を支える5つの音楽的な力

(1) 「感じる力」

「感じる力」とは、「自分たち一人ひとりが音や音楽を積極的に感じ取ろうとする力」と言えよう。

つまり、「積極的に感じ取ろうとする力」とは、「自分なりに音や音楽をしっかりを受け止め、豊かに感じることができるようになるための力」である。そして、音楽の豊かさや美しさに対する感性を育てるとともに、焦点を絞りながらも様々な音楽に出会わせたり、個人やグループにとって意味や価値のある音楽をききとらせたりすることで、「音・音楽を豊かに感じる力」を培っていくことが必要である。

## (2) イメージする力

「イメージする」とは、片岡によれば「目に見えないものをありありと頭に浮かべること」である。<sup>(1)</sup>

音楽の授業のなかでは、対象は音・音楽となる。きこえてくる音や音楽を聴覚や視覚でとらえ、それをこれまでの自分の経験から「～な感じの音・音楽だ」とイメージする。また、自分が実際に演奏するときには、「～な感じの音がほしい」「～な感じにしたいな」と能動的な態度で音楽にかかわっていくほど、納得のいく表現に近づいていくであろう。つまり、音・音楽をきいたり、自分自身で表現したりする際には、自己の内面と十分にかかわらせることでイメージが豊かにふくらんでいくのである。これは、音と自己との相互作用のなかでイメージが形成されていく様子を示している。

それには、授業中に音・音楽と十分にかかわらせるだけの場面を設定したり、内面に生じたイメージを具体的な音や音楽、もしくは短い形容詞、連想する名詞で表したりすることで明確にすることが有効であると考える。

## (3) コミュニケーション力

「コミュニケーション力」とは、活動をする際に、「コミュニケーション活動を積極的に取り入れながら共に価値ある表現をめざす力」のことである。

つまり、「音や音楽を媒介にして、自分たちの表現をより豊かにするためにコミュニケーションをする力」を高めたのである。

まずは、子どもたち一人ひとりの思いを素直に出し合うところから始めなければならない。子どもたちの思いが出されたら、それを互いに交流し、共有し、すり合わせるようにする。そのためには、音楽を媒介にして実際に演奏してみることである。そして、お互いに思いをやり取りするなかで表現が豊かになっていく姿を想定している。そのためには、学習する子どもたちのなかにお互いの思いを受け止めるという雰囲気が醸成されていることが条件となろう。

そして、ひとつの方向性にまとめあげるには、教師

が「どのタイミングでどの学習形態をとるか・練り合うための場の設定」「音楽を媒介にコミュニケーションをさせる」「魅力的な題材（コミュニケーション活動を必要とする学習活動を組み入れる）」など、道筋をつけていく必要がある。

また、一貫教育の教育力を活用することもその手立てとして効果的であろう。「異校種・異学年交流」はこれまでの成果からも期待できる学習形態である。

## (4) 創造力

「創造力」とは、「子どもたちがイメージを広げることで、さらなる工夫をめざす力」のことである。

「さらなる工夫」とは、ある楽曲を新たな角度で演奏してみたり、自分たちで音楽をつくり出したりする試みを行うことである。

その根幹となるのは、「自分たちで工夫しながら、自分たちにしか表現することができない音楽をつくり出したい」というモチベーションを持たせることである。自分たちの音楽表現をよりよくしたいという思いがなければ、創造的に音楽を表現しようという思いには至らない。つまり、「自分たちの音楽をつくり出そう」という思いを育てることが大切となってくる。

そのためには、魅力的な題材開発をすることと、創造力を支えるだけの音楽的な要素を小学校段階から系統的に身につけさせることである。

## (5) 表現力

「表現力」とは、「イメージする力や創造力を基に、より豊かな自己表現をする力」のことである。

「自己表現」とは、自分自身の思いを表現することである。「自分が何を表したいのか」を大切にしながら、自分自身が音や音楽に対して十分価値を感じながら表現する。さらには、伝える相手を想定しながら表現するのである。

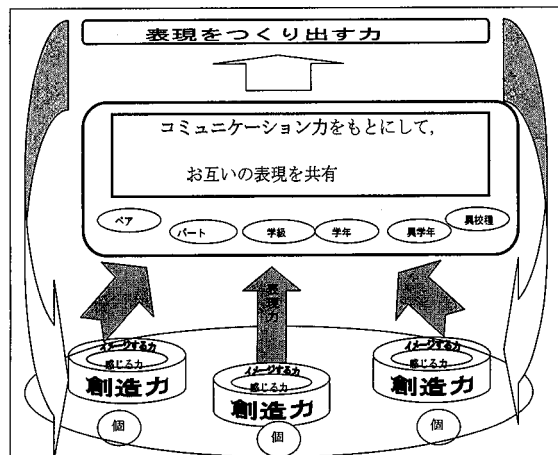


図-1 音楽科における「協同的創造力」イメージ図

#### 4. 音楽科における協同的創造学習

##### (1)音楽科における協同的創造学習の特徴

本学園における「協同的創造学習」のとはは、「子どもたちが協同しながら、既存の教科学習で学んだ力を土台に、新しい文化を創造・開発していくような力を育てる学習」である。音楽科においては、「集団で表現をつくり出す」過程をいい、個々が抱えている既存の音楽的価値観を集団の中で練り上げ、新たな音楽をつくり出す過程をいう。

その過程のなかで特に配慮する点は、子どもたちが各々で感じる多様な音楽的価値観を、コミュニケーション活動を通してすり合わせていく際、自分の思いや表現を人に押し付けるのではなく、お互いにもっている「よさ」を共有し合い、それをともに表現することに意義があると考えさせることである。「こんな感じ方もあるんだね」「こう表現すれば音楽がもっと豊かになるんだね」とお互いに認め合い、表現を広げていこうとする姿をめざすのである。言い換えれば、協同作業を通して子どもたちに培われる「他者を意識する思い」をベースに、子どもたちの感性および表現力を高めていくことになる。子どもたちは、音楽の授業などを通じて協同的に表現するなかで、お互いの思いや表現の特長に気づき、それを学び合うことで共に高まり合う。その結果、子どもたちの個としての音楽的能力も伸張されるという相乗効果をねらっているのである。

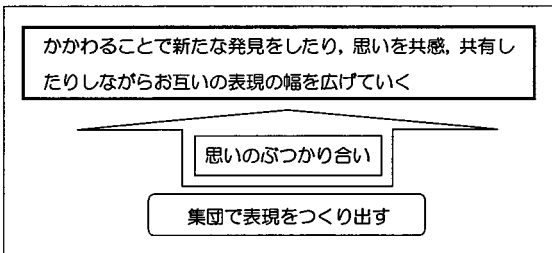


図-2 「協同的創造学習」の一過程

##### (2)音楽科における協同的創造学習の事例

###### ①文化の創造につながる学習材の開発

「協同的創造学習」を展開するためには、子どもたちがともにかかわることで音楽的な価値を共有することができたり、音楽をつくり出すことが子どもたちの喜びにつながったりすることができるような学習材を開発することが必要である。

総合的題材「オリジナルミュージカルに挑戦しよう！」(中学校第3学年)は、子どもたち自らが企画・立案・運営を進めるとともに、音楽科における「協同的創造力」を支える5つの力を、創作活動や表現活動

を通してバランスよく育てることができると考える。

###### ②協同的な学び合いを重視した学習活動

自分とは異なる考えにふれて新たな考えや技能、より高い価値を獲得して、一人ひとりの思考や表現を深めていくために効果があると思われる異学年・異校種での合同授業を試みる。例えば、小学生と中学生がともに活動し、表現をつくり出すことができるような授業を構想することで、新たな学びを創造する。

#### 5. 研究の仮説

授業過程の道筋として「協同的創造学習」を仕組むことで、音楽科における「協同的創造力」を育成することができ、音楽的能力を伸長させることができる。

#### 6. 授業の実践

##### (1)小中合同授業の実践—小6と中1の実践を通して

###### ①合同授業にいたるまで

小6と中1の組み合わせで異校種・異学年合同授業を実践した。ともに活動する相手が1学年違いということから、小学生が必要以上に中学生に頼ったり甘えたりすることを防ぐことができること、中学生の方も共に学ぼうとする意識を持ちやすい理由から設定した。また、たった1学年違いであるが、同じ校種では学べないことが学べると考えた。実践に当たって留意したことは、「双方にとって、いかに必然性を持たせることができるか」である。そのため、小中別々で学習を進め、後に発展として双方協力を求めたくなるようにそれぞれの題材を設定した。

合同授業でお互いの表現を合わせる過程では、小学生は「このようにしたい。」という自分たちの思いを持って、中学生に伝える。中学生は、小学生の言うことをただ受け入れるのではなく、もっとよい表現にするためのアドバイスを行う。異学年の子どもたちがお互いの思いを交流することで、思いや考え方の違いにとまどいながらも、喜びや達成感を味わうこと、それが、「お互いのよさを生かしながら、かかわり合っても学習する中で伸びてゆく子どもたちの姿」であり、音楽科における「協同的創造学習」であると考えている。

###### ②実践例1—「おはやし」の取り組みを通して—

###### 1) 小学校でめざすもの

子どもたちが日本音階を使って音楽をつくる活動することにより、日本の音楽に親しみを持つことをねらいとした。また、活動の中で「一人ひとりが表現していることは単純なメロディやリズムでも、グループの皆で合わせてみると魅力ある音楽」「自分もみんなも

満足できる音楽」をつくることにより、一人ひとりの考えが生かされ、新しい表現を生み出すことができると考えた。

2) 中学校でめざすもの

中学校のねらいは「アルトリコーダー演奏のための基礎的な奏法を身につけ、美しい音色を工夫して表現することができるようになること」であり、達成への一つの試みとして、小6との合同授業を導入した。中1の生徒は、「おはやしにアルトリコーダーで参加すること」と「おはやしの構成についてアドバイスをすること」を柱として合同授業を進める。既習事項を生かして小6にアドバイスするとともにアルトリコーダーでおはやしに参加することで、ともにおはやしを練り上げていくことをねらいとした。

3) 合同授業のゴールでめざす子どもたちの姿

合同授業については、小6が87%意欲を示しているのに対し、中1は58%と温度差がある。

小6と中1が合同で活動する場面では、小学生は中学生のアルトリコーダー奏にふれてその音色を味わい、ソプラノリコーダーとの重なりを感じながら演奏することができる。中学生は、小学生のつくったメロディにつけた対旋律をアルトリコーダーにより拡がりをもたせる。つまり、お互いの表現を合わせることで、全く新しい表現を生み出す子どもたちの姿がそこにある。

4) 題材の目標 (小6・中1共通部分のみ)

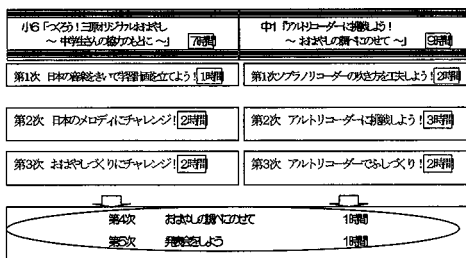
【協同的創造力】

○自分たちの伝えたいおはやしの音楽をつくりあげ  
るために、小学生と中学生がお互いの思いを伝え合  
いながら活動することができるようにする。

【関心・意欲・態度】

○小学生と中学生が、お互いの個性を生かしながら、  
協力しておはやしをつくったり演奏したりすること  
の楽しさを味わうことができるようにする。

5) 題材構想図



6) 指導の実際

ア. 小学校の実際

計画段階で中学生との合同授業を提案した後、音階

と簡単なリズムパターンやメロディパターンを提示し、ソプラノリコーダーを使って即興的に日本のメロディをつくらせていった。その後、お互いの意見を取り入れながらグループでメロディをつくっていった。その中には、アルトリコーダーを想定してソプラノリコーダーを休みにする箇所をつくるなどの工夫をしているグループもみられた。この時点でできた、メロディの楽譜と実際の演奏ビデオを中学校に届けた。

次のリズムづくりは比較的短時間でできたが、子どもたちが実際に息を合わせた演奏をするまでが難しく、自主的に課外に練習していた。

構成や演奏のタイミングについて整理していったグループもあった。

イ. 中学校の実際

生徒たちは、意欲的にリコーダー演奏に取り組んでいた。ふしづくりについては、「やってみよう」と思っている生徒が十数名おり、意欲を感じることができた。また、合同授業を行う際に中学生としてのねらいは、「小6の児童が考えたおはやしをベースとして、中1の生徒がアルトリコーダーのふしを加えたり、練り上げたりする」点に着目するよう働きかけた。具体的に考えさせるために、①「楽器の組み合わせ」②「楽器を合わせるタイミング」の二つの観点の提示をしたところ、自分たちでよりオリジナリティが出るように構成や演奏のタイミングについて整理していったグループもあった。

ウ. 小学校・中学校合同授業での実際

a. 練り合い

一つのグループの、小学生だけのおはやしと、中学生のアルトリコーダーが加わったおはやしをきかせて、違いや課題に気づかせるようにした。小学生からは、アルトリコーダーが加わると響きや重なりが気持ちよいことと、太鼓の音量が強すぎてせつかくのリコーダーの音がきこえにくいことが出された。中学生からは小学生がしっかりと演奏できていること、それに対して、中学生のアルトリコーダーがはっきりときこえていないことが指摘された。小学生は中学生にほめられて学習意欲を増し、中学生は小学生の「おはやしを共につくってほしい」という気持ちをくみ取った。次におはやしの表現を工夫する視点として、「楽器の組み合わせ」と「構成」の2点を確認し、グループでの活動に入った。

きき合いでは、太鼓の演奏部分のみ、リコーダーの演奏部分のみといった、楽器の組み合わせの工夫が評価された。時間的な都合で一グループの演奏であったが、演奏した小学生からの「中学生さんと演奏するとメリハリがついて気持ちよかった。」という発言や、授

業終了後中学生からの「結構おもしろい。」という声も聞かれ、次時への期待が持てた。

#### b おはやし発表

合同授業2時間目はおはやし完成、そして発表である。はじめのグループ演奏から、終わり方とテンポの工夫に気づかせ、仕上げのグループ活動に入った。その中で、前時にあまり見られなかった、小学生と中学生が意見を言い合う場面や、中学生が小学生にアドバイスしている姿が見られた。

最初のグループの発表が終わったとき、中学生から「おもしろい!」という声が上がった。「テンポよく演奏されて、きいている方も楽しくなる。」というのである。このような雰囲気の中、全グループ発表を終えた。

#### 7) 実践をふり返って

##### ア. 小学生の立場から

合同授業終了後、95%の小6が「中学1年生との学習が楽しかった。」とふり返った。その理由として、「優しく教えてもらえた。」という、中学生の態度面と「アルトリコーダーとの重なりがきれいだった。」という、アンサンブルの効果があげられる。そして87%の小6が「また中1と学習したい。」という結果になった。「学習が楽しかった。」「もっと学びたい。」という理由が多く、2時間の合同授業が小学生にとって得るものが大きかったことを示している。反省点として「中学生に自分の意見をあまり言わなかった。」「きき合いの時、しっかりと自分の意見を言うことができなかった。」の2点があげられている。

##### イ. 中学生の立場から

中学校のねらいの一つである「アルトリコーダーの基礎的な奏法を定着させる」については、大方の生徒が「上達した。」と思っている。「小学生とともに学習してアルトリコーダーが上達しましたか?」という問いに対し、「上達した。」と答えた生徒が50%、「まあまあ上達した。」と答えた生徒が50%という結果からそれがわかる。その理由としては「二つの音を重ねて演奏することができたから。」が最も多かった。

「小学生から学ぶことがあったか?」という問いに対して、「あった。」「まあまああった。」と答えた生徒は31名、「あまりなかった。」「なかった。」と答えた生徒は8名で、合同授業のよさを感じ取ることができた生徒が79%であった。理由は「小学生に教えたりいっしょに考えたりすることによって、私たちも力を伸ばすことができたから」などがあった。小学生とともにアルトリコーダーを用いて自分たちの表現を追求しようとする中学生の思いの現れであると思われる。

ただし、もう一つのねらいであった「おはよしの構成などを中心にした練り合い」については、グループ

によって差異があり、一律にその学習効果を生み出したとは言いがたい。

#### ③実践例2—「箏とのアンサンブル」の取り組みを通して—

##### 1) 小学校でめざすもの

本題材は、日本音階（平調子）を使った音楽のメロディをつくったり、「さくらさくら」の対旋律をつくったりして表現する活動をすることにより、日本の音楽への理解をより深めることをねらいとしている。「おはやし」の経験を生かし、対旋律の創作・演奏も行うことで、より広がりのある表現を経験させていく。

##### 2) 中学校でめざすもの

本題材は、箏演奏のための基礎的な奏法を身につけ、和楽器の音色に親しむとともに既習のアルトリコーダーと合わせることで、箏とアルトリコーダーのアンサンブルをつくり上げることができるようになることをねらいとする。教材は、「さくら」を用いる。また、小学生との合同授業を行うことで、自分とは異なる考えにふれて新たな考えや技能、より高い価値を獲得して一人ひとりの思考や表現を深めていくために再度合同授業を行い、アンサンブルで自分たちの音楽をつくり出す、「よさ」を発揮できるように活動させることを試みる。

小学校との合同授業については、「前回行った小学校との合同授業」について、「自分のためになったと思っている生徒」は78%の35名で、「自分のためになったと思わない生徒」7名17%をはるかにこえている。

##### 3) 合同授業のゴールでめざす子どもたちの姿

小6と中1が合同で活動する場面では、お互いの表現を合わせることで、全く新しい表現を生み出すことができる考える。その過程では、小学生は「このようにしたい。」という自分たちの思いを持って、中学生に伝える。中学生は、小学生の言うことをただ受け入れるのではなく、もっとよい表現にするためのアドバイスを行う。異学年の子どもたちがお互いの思いを交流することで、思いや考え方の違いにとまどいながらも、喜びや達成感を味わうこと、それが、「お互いのよさを生かしながら、かかわり合って、ともに学習する中で伸びてゆく子どもたちの姿」であり、音楽科における「協同的創造学習」であると考えられる。

##### 4) 題材の目標（小6中1共通部分のみ）

###### 【協同的創造力】

○自分たちの伝えたいアンサンブルをつくりあげるために、小学生と中学生がお互いの思いを伝え合いながら活動することができるようにする。

###### 【関心・意欲・態度】

○小学生と中学生が、お互いの個性を生かしながら、協力してアンサンブル活動することの楽しさを味わうことができるようにする。

## 5) 指導の実際

### ア. 小学校の実際

「さくらさくら」のリコーダー奏と平調子の音階提示をし、対旋律をつくってメロディと合わせた。その後、中学生が箏で「さくら」を学習していることを知らせ、合同アンサンブルにすることを確認した。

### イ. 中学校の実際

教材曲日本古謡「さくら」を用い、全員が箏の演奏に挑戦する。箏の数に合わせて8グループでローテーションを組む。専門的な外部講師がTTで入り、効果的に技術指導が行えるようにした。それと平行して、アルトリコーダーによるアンサンブルも行った。そのふしは、生徒の創作による。箏による主旋律とアルトリコーダーによる副旋律によるアンサンブル活動である。

### ウ. 小学校・中学校合同授業での実際

前回実践した合同授業の課題「自分の意見をあまり言わなかった。」「練り合いの不足」を受けて、今回は、グループ内で小学生と中学生とのペアを組んで活動するようにした。1時間目は、中学生が箏で「さくら」を弾いてみせたり、箏の各部位の名称や基本的な奏法などを中学生がペアの小学生に教えたりすることから始めた。初めて箏に触れた小学生は、新鮮な驚きとともに感動していた。その後、お互いのつくった対旋律を練習したり、ペアで合わせたりする活動を行った。

2時間目は、「さくら」合同アンサンブルの完成に向けて練り合う時間とした。中学生のリーダーを中心に、グループごとのやり方で活動を進めていった。教師は活動が停滞しているグループに進め方の支援に入ったり、楽器のタイミングや組み合わせについてのアドバイスを行ったりした。

## 6) 実践をふり返って

### ア. 小学生の立場から

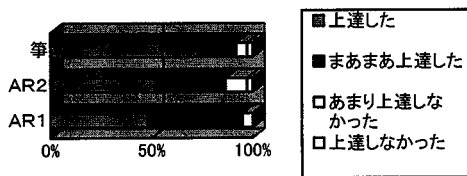
合同授業終了後、前回同様95%の小6が「中学1年生との学習が楽しかった。」とふり返った。その理由として、「アドバイスをたくさんもらった。」という中学生の態度面と「箏を使った学習が楽しかった。」という、アンサンブルの効果があげられる。また、「リズムやメロディをつくる力が伸びた。」と79%の小6が振り返っている。理由として「音の重なりに気をつけることができた。」「自分でつくることができた。」「前よりつくりが分かってきた。」など、音楽的な力を挙げている子どもが多かった。

課題としては、23%の小6が「中学生に自分の気持ち

が言えなかった。」「中学生に教えてもらえなかった。」とコミュニケーション面について挙げている。

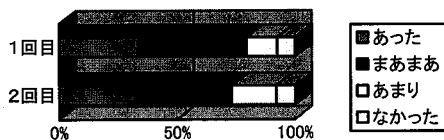
### イ. 中学生の立場から

合同授業を通して演奏が上達したか



これは、「合同アンサンブルを通して箏やアルトリコーダーが上達したか。」というアンケートの集計結果である。箏は、大きな成果が見られ、生徒たちも達成感を感じることができている。AR2はこの度のアルトリコーダーの実践結果を表しているが、やや低めの傾向となっている。どちらかという箏に重きがあったことを表していると思われる。全体的には、合同授業の結果、音楽的能力が高まったと言える。

小学生から学ぶものがありましたか



これは、「合同授業で学ぶものがあったか。」の集計結果である。わずかながら2回目の交流後の割合が高くなっている。これは、2回目ということで「中学生として、小学生とどのように接したらよいか。」がわかったことや、「アンサンブルのよさ」が体感できたことや、「小学生のがんばりから得るものがあった。」という、心情的にプラスのものが効果を得た結果である。ただし、「小学生が協力してくれない。」「前の学習と変化がない。」「教えるのがずっとこちらだった。」などの否定的な思いを持っている生徒もいる。

## ④二つの実践から見えてきたもの—成果と課題—

合同授業の成果は、「お互いの表現を合わせることで、より新しい表現を生み出すことができたこと」「異学年の子どもたちが、お互いの思いを交流しながら練り上げる過程を大切にすることができたこと」の2点と言える。前者は、小中の子どもたちがともに「リコーダーや箏の音色に着目した合同アンサンブル」に感動していることからその成果が伺える。後者は、真摯に取り組む小学生の姿に「もっとがんばらなければ。」協

力しよう。」と自らを奮い立たせる中学生の姿をみるのができたし、優しく教えてくれる中学生の姿に「もっといっしょに学びたい。」「あんな旋律をアルトリコーダーで吹きたい。」と、あこがれのまなざししている小学生の姿をみるのができたことから、その成果が伺える。これは、合同授業のねらいの中で「お互いの必然性」や「各々でつけたい力」を、明確にして授業に取り組みさせるのができた結果だと思われる。反対に「アンサンブルの構成などを中心にした練り合い」については次の課題が残った。

ア. 学習内容の不足

イ. 授業時間数の確保の難しさ

ウ. コミュニケーション不足

アについては、合同授業の前にもっと「練り上げるための視点」や「その手だて」について「学習を深めるために教師が支援すべきことがあった」ということ、イについては、時間の調整が難しく、合同授業の時間が確保しにくい状況であること、ウについては、練り合うための視点が不明瞭だったことと合同授業の時間数が不足していたこと、学習形態の配慮不足が原因と考えている。

成果と課題が見えてきたなかで、子どもたちが「合同授業をやってよかった。」「次もやってみたい。」と思っていることが光明である。「お互いのよさを生かしながら、かかわり合ってともに学習する中で伸びていく子どもたち」をめざして、さらなる題材開発に着手していきたい。

## (2)中学校選択音楽の実践から

「オリジナルミュージカルに挑戦しよう！」の実践

1)オリジナルミュージカルに挑戦させることで、「協同的創造力」を支える5つの力をどのように育てるか。

### ①感じる力

「感じ方の支え」となる「感じる力」は、「豊かに感じるができるようになるための力」ととらえている。「自分なりに音や音楽をしっかりと受け止め、豊かに感じる」ためには、初発の驚きや感動を誘発することができるように教材と出会わせることである。例えば、子どもたちが自分たちの仲間がつくった曲に出会うこと自体が新鮮であり、それが驚きや感動につながったり、表現するための意欲を高めたりする原動力となる。また、既成曲の演奏を行うこととは異なる価値観で、自分たちの仲間がつくった曲を演奏する喜びを感じさせることができるというねらいを持たせることができる。

### ②イメージする力

目に見えないものをありありと頭に浮かべたり、目

の前の物を他の物に置き換えたりする力となる「イメージする力」は、自分たちが実際に表現するとき、「どのような感じの表現にしたいのか」を能動的に考えることで豊かに広がりと考えられる。ミュージカルの表現を考える際には、とりわけ、自分たちが豊かに自由な発想でイメージをふくらませることが重要である。ミュージカルは、テーマ設定に始まり、脚本、音楽、舞踊、演劇、美術など、様々な芸術的表現をつくり上げていかなければ上演することができない。自分たちの現在の生活をふり返るなかで「今一番表現したいことは何なのか」を基底にして、各表現要素についてイメージをふくらませていく。とりわけ、音楽については a「ストーリー展開上から考えられる歌詞の創作から、さらにイメージをふくらませて、曲づくりができるようにする」、b「各シーンの展開に必要な音や音楽をつくったり、選曲したりする」、c「音楽からイメージをふくらませることで、その音楽にふさわしい動きを考える」と大きく分けて3つの学習を進めるなかでイメージする力が培われると考えた。「このシーンは悲しい場面なので、悲しい感じの曲をつくりたい」、「この曲は、弾んだ感じにしたいので、ドラムを入れて曲づくりをしたい」、「この場面は、ほのぼのとした感じにしたいので、そんな感じをイメージできるような曲を選曲したい」、「あの世から現世にいくための音づくりは、不思議な感じにしたい」、「はずんだ感じの曲に合う動きを最近のヒップポップの動きを参考にしよう」、などとイメージすることが、音・音楽として表現できるようにつくれるときに、子どもたちの気持ちのなかで豊かに培われていくのである。

### ③コミュニケーション力

自分たちのイメージを交流するため必要な「コミュニケーション力」は、各表現方法をお互いに交流するために必要な手段である。個人的に考えていることをひとつの方向性をもって集団のものとしていくためには、思いを相手にわかりやすく伝える必要がある。とりわけミュージカルの場合は、それが言葉であったり、各分野における表現で伝え合ったりする。そのためには、学習形態の工夫をこらす必要がある。各分野において核となるリーダーをおいて学習を進めていくとともに、小グループで進めてきた物を全体場で練り合う場面も設定する。そして、全体で練り合ったものを受けて、再び小グループで練り合うようにする。それは、全体で総合的に表現する場面になったときも同様であり、自分たちの表現を中心に据えて練り合うという必要性を通して、子どもたちのコミュニケーション力を培っていくようにする。

### ④創造力

子どもたちがイメージを広げることで、さらなる工夫をめざすことで育成していく「創造力」は、ミュージカル上演に必要な表現を自分たちで生み出していく力である。その根幹には、「自分たちで工夫しながら、自分たちにしか表現することができない音楽をつくっていきたい」というモチベーションを持たさなければならぬが、ミュージカルをつくり出す過程で、「自分たちの音楽をつくり出そうとする思い」は「オリジナル」という部分に着目させることで比較的持たせやすいと思われる。

各分野での表現を生み出すことは、当然必要なことであるが、音楽表現においては、前述した次の3つの学習を中心に進めることになる。a「ストーリー展開上から考えられる歌詞の創作からさらにイメージをふくらませて、曲づくりができるようにする」、b「各シーンの展開に必要な音や音楽をつくり、選曲したりする」、c「音楽からイメージをふくらませることで、その音楽にふさわしい動きを考える」は、それぞれ「曲想表現の力」「表現を広げる力」「表現を生み出す力」を育成させることができる。子どもたちに各シーンの音楽や雰囲気を感じさせることで、それに見合うような表現をつくり出すことは、「曲想表現の力」を培う。また、既成の曲を用いるけれど、子どもたちの表現を一体化させることで音楽の魅力をさらにふくらませることとなり、それが「表現を広げる力」となる。そして、自由な発想で音楽を生み出す、「表現を生み出す力」がこのミュージカルを大きな支える力となる。

## ⑤表現力

「豊かな自己表現力」が求められる「表現力」は、ミュージカルをつくり上げるなかで、子どもたちに一番つけさせたい力である。子どもたちが「自分たちでミュージカルをつくり上げる」ということに価値を感じ、「自分が何を表したいのか」を大切に、自分たちが生み出した選曲したりした音や音楽を表現していく。さらには、伝える相手にわかりやすく表現できるような工夫をすることで、子どもたちの「表現力」を高めていくようにする。

### 2) 「テーマ設定」

①フリートークキングによる「題材探し」および「テーマ設定」 → **全体の場で**

②テーマと自分とのかかわり → **個人的に**

○ テーマ 「友情」「生と死」

○ 「友情」「生と死」の関連づけ、「現世」と「死後」についての自分の思い

<生徒記録から>

・現世から死後の世界に行くというのは、やはり怖いこと。だけど、みんな絶対に経験しないといけないこ

とだから、自然なことだと思う。友だちの死は、とても悲しいことなので、それをクローズアップさせることで、友情について考えるチャンスになると思う。

・現世と死後は全く違うとは思わない。死後の世界に入ったなら楽になるとは思わない。それは、ある程度死への恐怖がないと生きている意味がない気がするからだ。

これらをもとに、脚本担当者が台本を練り上げていった。

### 3) 音楽づくり

①リーダーを中心とした音楽づくり

②既成曲を活用して

①は、ミュージカルの中で演奏される曲について、「新たな音楽を生み出す」という観点で音楽づくりを進めていった。各分野を進めていくリーダーを決定し、音楽づくりはそのリーダーを中心に行った。歌については、歌詞を全員がつくり、その中から選考し、曲づくりに取り組んだ。楽器は、ピアノ、キーボード、ドラムから選択し、イメージに合わせて曲づくりをした。音楽のイメージがあっても、記譜や伴奏について音楽づくりが難しい面もあり、その場面では教師の支援のもとにつくっていった。

②は、すべての音楽を子どもたちがつくることも難しいので、既成曲も活用するようにした。音楽を挿入する場面については、全体やリーダーが教師とともに脚本に沿って考え、どのようなイメージの曲を流せばよいかを決定していった。その際には、外部講師によるTTにもかかわってもらうようにした。

### 4) 子どもたちのふり返りを生かす

授業は、全体をまとめるリーダー的存在の子どもたちを中心に据えて、展開することができるように配慮した。そうすることで、「今やらなければならないことは何なのか」に気づかせ、積極的に、かつ能動的に子どもたちが活動できることをねらった。例えば、「どの場面の何が不完全なのか」を子どもたちの間で話し合わせたり、事前に教師と話し合う中で気づかせたりすることで、より能動的に進めることができる配慮をしていった。

<生徒記録から>

・ステージとしては、文化祭の舞台で発表をしているが、みんなでそれをふり返ることで、さらによいものを追求できるように話し合いを重ねていった。自分たちが今、ミュージカルで、お芝居、ダンス、歌を一気にやってどれだけそのような力があるのかがわかったし、練習では大変なこともたくさんあったけど、イメージよりは上の作品になった。気づきがたくさんあったので、次へ、どんどんつなげていく。



・ダンスも歌も演技も、全てに置いて極めたい。そのために、細かくメモをとっておいて、みんなでどうしたらいいかを話し合うようにする。そのために、細かくメモをとっておいて、みんなでどうしたらいいかを話し合うようにする。

### 5) 成果と課題

・子どもたちの中から選出したリーダー中心にミュージカルづくりを行うことで、自分たちで進めていくという意識を高めることができたり、意欲的に練習にのぞむことができたりしている。ただし、すべてをまかせるのではなく、音楽づくりなどにおいては、教員の支援が必要などころもあるので、リーダー格になっている生徒と連携をとって進める必要がある。

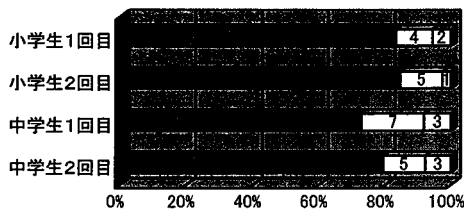
・「協同的創造力」を支える5つの力が、すべての子どもにも均等に育成されているとは限らない。ミュージカルづくりにおける各分野に所属して、リーダーを中心に活動するため、つきたい力において偏りが生じる場合があるかもしれない。ただし、ステージにおける自己表現は、自分におけるベストな状態を表出したいという思いで活動しているので、音楽を媒介にして表現力を培うという点においては、ねらいを達成していると思われる。

## 7. 仮説の検証

—今年度の題材開発から見えてきたこと

最後に、今年度開発した題材終了後の子どもたちのアンケートデータを中心に、仮説の検証を行う。まず小中合同授業であるが、着目したことは、アンケート項目「合同学習から学ぶことがあったか」で、子どもたちの合同学習についての有益感である。次のグラフは、1回目と2回目の合同学習後に調査したものである。

合同授業で学びがあったか



■あった ■まあまああった □あまりなかった □なかった

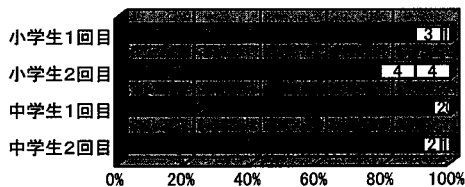
この集計結果から、小学生、中学生ともにわずかながら「合同授業で学びがあった。」と感じている子どもの数値が上がっていることがわかる。これは、合同

授業が有効的だと感じている子どもが増えたことを意味する。回数を積み重ねることで、「合同学習することに慣れ、その楽しさを感じながら学習することができたのではないか。」と予測するとともに、小学生は、「学べることが多い。」「楽しい」と感じ、中学生は、「指導することで自分の力になる。」と感じている生徒が多いことがわかった。その事例として生徒記述を挙げる。  
 <生徒記録から>

この学習をすることにより「成果」があったと思います。それは、「教える」ということです。これによって、「どうやって教えたらいかが」わかるようになりました。これからの「課題」は、「ちゃんと合わせる。」です。同じ学年同士の音が重ならなければ、工夫の意味もなくなります。だからちゃんと合わせることだと思いました。「取り組みにかかわる感想」は、中学生だけが意見を言う形じゃなくて、中学生も小学生も自分から意見が言えていたのがすごくよかったです。自分の意見が通らなくて「もう意見を言わない」ではなく、次は「どのような案を出せばよいか」ということを話し合っていたし、自分の楽器ではない「太鼓」について、みんなで話し合えました。よって、交流授業はいいと思いました。自分とは違う意見が出たときにどのようにしたらよいか、考えることができたのでよかったです。

次に、「合同授業を行うことで私たちがつきたいと思っている力が、各々の子どもたちについているかどうか」について、子どもたちのデータをグラフ化したものを示す。

つきたい力がついたか



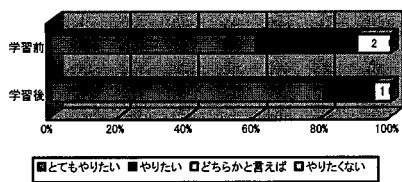
■ついた ■まあまあついた  
 □あまりつかなかった □つかなかった

小学生は、「本題材を進めることで、リズムやメロディをつくる力がついた。」、中学生は、「小学生に教えることで、アルトリコーダーや箏の演奏技術があがった」、の項目について各々調査したものである。小学生は、「中学生との合同演奏のためにがんばったり、指導してもらったりすることで力がついた。」、中学生は、「ともに演奏することで技術や意欲が高まった。」と判断しており、グラフから「かなりの割合で子どもたち

は各々でつきたい力つけることができている。」と推測できる。

これらのことから考察すると、本題材でつけたかった協同的創造力「自分たちの伝えたいアンサンブルをつくりあげるために、小学生と中学生が互いの思いを伝え合いながら活動することができるようにする力」は、合同学習という協同的創造学習の形態を用いることで高めることができたと言えよう。ただし、本題材で有効であると判断した合同学習であるが、「学習内容」「合わせる学年」「必要時間数」においては、これからさらに吟味すべき内容である。

ミュージカルづくりに対する思いの変化



次に、中学校選択音楽における子どもたちの気持ちの変容についてのデータを示す。

これは、学習前と学習後の「ミュージカル」について思いの変化を示したグラフである。「やりたい」という数値は高いものの、「どちらかと言えばやりたい」と思っていた生徒が、授業終了後には「やってよかった」と、肯定的にとらえる数値として上がっている。これは、生徒たちの達成感と大きな結びつきがあると思われる。

これは、本題材の「協同的創造力を支える5つの力を培うことで、オリジナルミュージカルをつくりあげる価値観を共有しながら新たな文化を生み出すことが

できるようにする。」という目標を達成したとも言えよう。以上のことから、音楽科における「協同的創造力」＝「表現をつくり出す力」に着目し、「アンサンブル」や「オリジナルミュージカルづくり」など、お互いに持っている「よさ」を生かしながら学習を進めることで、各々の表現を大切にしたり、意見交流をしながら、個々の自己表現力を高めたりすることに有効的であることがわかった。引き続き既成のものにこだわるのではなく、新たなものを集団の力を通してつくり上げ、練り上げていく過程を工夫することができる学習内容を盛り込んだ題材づくりに励み、21世紀をたくましく生き抜くことができる生徒を育成することを目指したい。

さらには、ひとつの題材における子どもたちの変容という短期における評価で測っているわけだが、私たちが開発するカリキュラムに伴って、「長期的なスパンにおいても協同的創造力を身につけた子どもたちを育成することができるかどうか」をいう視野に立つことの必要性も感じている。

#### 《引用文献》

- 1) 子どもの感性を育む；片岡徳雄（NHK ブックス）1990, p96

#### 《参考文献》

- ・学部・附属学校共同研究紀要第33号 2004（広島大学 学部・附属学校共同研究機構）
- 「自分たちの表現をつくり出す力を育てる音楽学習の開発 一小中連携を生かした音楽科カリキュラム開発を目指して一」